塩屋地区の歴史文化遺産一覧（1）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
1	木造菩薩立像	◎								●		大津八幡神社薬師堂に安置され、薬師如来像の両脇付として日光・月光菩薩像が伝えられている。現在は赤穂市立歴史博物館に寄託されている。市指定文化財。
2	木造浅野赤穂藩主坐像 (付)厨子3基	◎			5　6				●	●		浅野家初代より三代にいたる藩主の木造坐像である。3躰の藩主像は、その彫成及び表現から江戸期の肖像彫刻としては佳作であり、京都の仏師作家の手によって制作されたことが推定される。制作時期は18世紀後半頃と考えられる。市指定文化財。
3	木生谷三宝荒神社 義士画像図絵馬 (付)牽馬図絵馬1面	◎			6				●	●		義士画像図絵馬は、四十七士に萱野三平像を加えた計48面あり、大石内蔵助、主税の2面は大きめのものとなっている。大石内蔵助良雄像、大石主税良金像、萱野三平像には絵師である法橋長安義信の落款が見られ、内蔵助像には奉納時期を示す「慶応元(1865)乙丑季九月」の年記を読み取ることができる。また絵馬には奉納者の名前が記されており、三宅源兵衛をはじめとする木生谷及び周辺の在住者名や集団名が見られる。市指定文化財。
4	暦法算額絵馬	◎								●		大津村庄屋であった出口屋・浜田文治が寛政3(1791)年9月に大津八幡神社に奉納した暦法算額絵馬。算額絵馬は、江戸時代の和算の水準を示すものとして高い評価を得ている。このうち暦法を記した絵馬は珍しく、全国に4例しか確認されておらず、当絵馬は最古のものである。市指定文化財。
5	真光寺旧蔵・ 柴原家文書	◎			30			●				西浜塩田最大の塩業者で、近世において赤穂藩の御蔵元役として藩財政の一翼を担い、代々塩屋村大庄屋を世襲していた柴原家ゆかりの古文書類。市指定文化財。
6	塩屋阿弥陀堂の三地蔵	●			6　30			●		●		享保5(1720)年に塩屋村と有年村との間で起こった山論の犠牲者3名を偲んで享保5(1720)年に建立された3体の阿弥陀如来像石仏。「山公事の地蔵」ともいう。
7	横谷地蔵	●			6　27					●		横谷は山を隔てて高雄地区真殿へつながる谷を言い、塩屋には今も「まとの越え」という言葉が残っている。その山道を見守るように建てられているのが横谷地蔵で、高さ66cm、銘文には大正8(1919)年に造られたことが刻まれている。『播州赤穂郡志』には赤穂の名所として「御崎の浜、横谷の流れ、興少なからず」という言葉が伝わる。雲火焼の創始者・大島黄谷は雅号を横谷の木偏をとって黄谷とした。平成16(2004)年に地蔵堂建替え。
8	水筋井戸番地蔵	●			6　28					●		地蔵菩薩が5体安置されている。塩屋浜ん台の善右衛門が慶応3(1867)年、井戸を掘り当てた。地蔵は井戸の守り本尊で、傍らには石枠で組まれた井戸が残り、現在でも清水が湧き出ているという。旧赤穂上水道の戸島用水にも接している。
9	塩屋大地蔵	●			6					●		寛保2(1742)年に流行病の発生により領内で270人が死亡し、病魔退散と使者の霊を慰めるため、大地蔵建立を赤穂藩に願い出、35年後の安永6(1777)年に認められ建立されたという。台石には寛保2(1742)年の銘が見られる。元は名崎の三昧(火葬場)にあったが、赤穂市斎場設立に際し現在地に移された。
10	ハブ池地蔵	●			6					●		地蔵には天保11(1840)年の銘が刻まれており、溺死者供養のために建立された。昭和の頃、一つだけ山上にあるのを可哀想と考えた村人が移したものであるという。
11	五軒家地蔵 (子授け地蔵)	●			6					●		昔大津川にかかる橋が流され、水害の根絶を願って造立された地蔵。後にこの地蔵の前に陽根の形をした石が置かれ、触れると子を授かると言われ「子授け地蔵」として信仰された。基礎石には昭和10(1935)年の記載があるが、像と石材が異なる。
12	十五軒家地蔵 (歯の地蔵)	●			6					●		大津川の左岸の土手の上に安置されている。いつのころからか歯痛に効くとされ「歯の地蔵さん」として信仰を集めている。台石には安政4(1857)年の銘があるが、像と石材が異なる。
13	七軒家地蔵 (目の地蔵)	●			6					●		大津川改修工事の際、一体の地蔵が埋まっていたのを引き上げて堂を建て、村の守り本尊としたが、まもなく村に大火事があり、村人は水の中にいた地蔵さんが、陸に揚げられて暑くて怒ったのだろうということで、堂を取り外した。以降、七軒家に火事は起こらなくなったという。今では「屋根なし地蔵」「目の地蔵」として親しまれている。寛政11(1799)年の銘あり。
14	首塚地蔵(清水)	●			6　35					●		船渡橋から少し北西に行ったところに「首塚地蔵」と呼ばれる地蔵が安置されている。役人となった弟が盗賊団の兄を捕らえ、涙ながらにこの地で首を刎ねた。これを憐れんで村人が建てたのがこの地蔵であり、首から上の病気を治癒するとされている。(赤穂の昔話)
15	道しるべ地蔵(清水)	●			6　27					●		道標を台石に転用した地蔵尊。「川こしうね道」とは大津川を渡り、有年に通じる道のことを指し「びぜん道」とは帆坂峠を越えて備前に至る備前街道を指す。道標はもと備前街道の傍に南を向いて立っていたと思われる。この道標には文化11(1814)年の銘が入っているが、像と石材は異なる。
16	大津奥三昧跡地蔵	●			6					●		スクモ塚の裾の田地の一角に、奥大津の三昧跡があり、穏やかな顔をした地蔵が安置されている。村人が有年の石工に依頼して造らせたところ、依頼者の顔そっくりの地蔵と評判になったという言い伝えがある。台石には明治4(1871)年の銘があるが、像と石材が異なる。
17	地蔵(帆坂)	●			6					●		寛政5(1793)年に造立された、像高105cmの丸彫り立像。武士が建立したと伝わる。
18	大津湯の内池横地蔵	●			6					●		大津の湯の内池横の堂に祀られた、像高41cmを測る半肉彫りの立像。
19	地蔵(高山霊園)	●			6					●		高山霊園内にある享保9(1724)年造立の丸彫り坐像。このほか1体の丸彫り地蔵がある。
20	地蔵(向山)	●			6					●		木生谷向山にある、像高33cmの丸彫り坐像。台石には宝永二(1705)年の銘があるが、像と石材が異なる。このほか1体の地蔵がある。
21	村中地蔵	●			6					●		かつて流月庵に大小2体の地蔵が夫婦地蔵と呼ばれていた。木生谷に地蔵がないことを憂いた庵主が「歴世塔」と刻まれた墓石を台座とし、大きい方の地蔵を与えたのがこの地蔵という。木生谷橋のたもとに祀られていたが、大津川の改修時、昭和46(1971)年に現在地に移転。
22	居村観音	●			6					●		新田居村の山裾に祀られた石仏で、江戸時代末期、眼病の旅人が井戸水で洗眼し治癒したことに感謝し建立。土地の人々は眼病に効く「地蔵」として祀ったが、昭和28(1953)年、堂宇改修時の調査で、地蔵菩薩像ではなく観音菩薩像であることが判明。毎年4月18日には信者一同が集まり法要を営む。
23	烏谷観音	●			6					●		天長年間(824～834年)に、弘法大師空海が2体の観音像を石に刻んだと伝わる。その際、1体は魚供養のために海へ、1体は鳥獣供養のために山へ埋められたという。堂内には像高約50cmの自然石の秘仏があり、享保15(1730)年の「由来書」に記載されている。
24	西の観音様	●			6					●		塩屋北畔の九右衛門が、夢のお告げから水中より観音様を拾い上げ、観音堂を建立したといわれる。文政13(1830)年には、住民が会所へ嘆願して銀札300目の貸付を受け、堂宇の屋根替えや台石取替などを行った記録がある。現在は塩屋西観音堂集会所に安置されていて秘仏となっており、延宝年間(1673～1681)以降の開帳記録が残されている。
25	道標(塩屋広道)	●			6　27		●					赤穂城下町西惣門から阿弥陀堂までを広道というが、広道と村中小道への分岐点に「右びぜん道」と刻まれた道標がある。花崗岩の自然石で高さ約70cmを測る。
26	塩屋村道路元標	●			6		●					江戸時代の塩屋村会所跡に、町村間の距離を測るための起点となる道路元標が建てられている。
27	新田居村の道標	●			6		●					「左　はま遍(浜辺)　右　ひせん(備前)　道」と刻まれる。年代不詳であるが、左の道を行けば塩田・浜に至り、右に行けば大津を経て備前に至ることを示す。
28	権現の題目塔	●								●		権現の三昧跡の横に「南無妙法蓮華経」と日蓮宗の題目が彫られた石塔があり、文政9(1826)年に船渡の妙典寺が建立したものである。
29	帆坂の題目塔	●								●		帆坂峠に向かう道筋に「南無妙法蓮華経」の題目が刻まれた石塔がある。日蓮宗が盛んであった大津において、天保2(1831)年に日蓮の550回忌を記念して身延講中によって建立されたものである。
30	妙典寺開基日恵上人塔	●			6					●		妙典寺境内にある。妙典寺を開基した日恵上人の石碑。明治43(1910)年建立。
31	荒神社石燈籠 奉納記念碑	●			6					●		荒神社(塩屋)境内にある。大正13(1924)年建立。
32	警鐘台建設記念碑	●			6					●		昭和10(1935)年建立。
33	看護婦殉職供養塔	●								●		明治12(1879)年のコレラ禍の後に建てられた村立の避病院では、大正初期のチフス流行の折に2人の看護婦が感染し命を落とした。平成3(1991)年に、地域の人々によって墓石が供養塔として祀られた。
34	コレラ病死者供養碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。当時流行したコレラで亡くなった人々の供養碑。明治14(1881)年建立。
35	忠魂碑	●			6					●		以良羅山の山頂に大正13(1924)年に建立。忠魂碑には246人の戦没者が祀られている。碑文の文字は、旧日本帝国軍東郷平八郎元帥の書である。折方出身の松崎伊織中将が統合元帥の副官を2期勤めた関係から書をなしたといわれている。
36	岡部氏の墓	●			6					●		岡部六弥太という源氏の武将が、堂山のイチブ(麻の一種)畑であった戦で憤死し、その祟りからイチブが育たなくなったとされ、慶応元(1865)年に供養墓が建てられた。
37	西山徳治君碑	●			6					●		明治6(1873)年に大津村の豪農に生まれ、小学校中等科を卒業し閑谷学校で漢学を学ぶ。卒業後は木生谷尋常小学校で教鞭をとった。後に推されて師範学校に進むが病となり、学業半ばに帰宅、療養の甲斐なく明治27(1894)年22歳で没。明治33(1900)年に友人たちが彼の才能と徳行を忍び建碑した。
38	吉村先生之碑	●			6					●		大正13(1924)年建立。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（2）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
39	安部先生碑	●			6					●		安部浅吉は安政4(1857)年新田村生まれ。随鷗寺内の学舎で学ぶ傍ら俳句を嗜み、大島宗丹翁に師事して源氏流の挿花の技を極め松韻斎と号した。近郷の子弟に俳句や謡曲、挿花を教え地域の文化人として活躍、昭和3(1928)年の七回忌にあたり、門人が碑を建て追慕の意を表した。
40	里正有本翁碑	●			6					●		有本新九郎は元文2(1737)年大津村生まれ、父新三郎の後を継ぎ庄屋となる。大津村はしばしば旱魃の被害にあい、これを憂いて帆坂に大池を完成させ、旱魃から村を守った。仏教の信仰厚く安養寺の再建にも尽力した。新九郎の行為に村人は崇敬の念を惜しまなかったが、藩公の忌諱にふれて身を引き、備前三石に転居し文化9(1812)年没。翁の100回忌にあたり同志が建碑してその徳を明らかにした。明治44(1911)年建立。
41	明治三七・八年戦役 凱旋祝賀記念樹碑	●			6					●		明治39(1906)年建立。
42	西川先生碑	●			6					●		妙典寺境内にある。西川奥三吉は慶応2(1866)年大津村生まれ。明治11(1878)年17歳のとき恩師小林新也とともに西灘小学校教員に採用され、大嶋千代麿・平尾杉松・安部浅吉らと教壇に立った。明治29(1896)年に木生谷小学校校長を拝命して子弟の育成に尽力。明治38(1905)年に病気で教職を去った後、寺子屋を開き、近隣の青年の教育に尽くした。村の総代や寺の総代、郡会議員、村会議員を歴任。大正8(1919)年、58歳で他界。師を慕って門下生が昭和12(1937)年碑を建立した。
43	宇田勝平の墓碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。明治9(1876)年、塩屋村に入った泥棒を追った時の傷がもとで死んだ宇田勝平の墓。大泥棒を捕まえたということで明治10(1877)年に145円が子の亀太郎に下がり、墓をつくり供養した。
44	黒田力松元幸先生碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。柔術高木流の十三代師範であり、明治43(1910)年に死去。大正11(1922)年に建立。
45	八木一治郎丕績碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。昭和25(1950)年、赤穂町消防団副団長であった八木一治郎が昭和24(1949)年に殉職したことを悼み、その業績を称えて赤穂町消防団塩屋分団によって建てられたもの。
46	芭蕉句碑	●			6					●		阿弥陀堂(塩屋)境内にある。弘化4(1847)年建立、平成5(1993)年再建。
47	浄響碑	●			6					●		真光寺境内にある。大正9(1920)年、西播磨研響会本徳寺の梵唄の指導者として大きな力徳を備えた人物である第十九世義巧師の弟子たちが人柄にひかれ追慕の碑を建立。
48	谷口先生碑	●			6					●		木生谷の谷口紋次郎は池の坊流を子弟に教育した。明治36(1903)年建立。
49	和気清麻呂公御舟寄松	●			35					●		和気清麻呂が宇佐八幡へ行くとき、この松に括り付けて船を停め、郷里である和気に立ち寄ったという。(赤穂の昔話)
50	堂山遺跡出土縄文土器	●			23　34						●	現在の山陽自動車道赤穂インターチェンジ設置や鉄塔建設に伴う発掘調査によって、縄文時代前期(約6,000年前)から縄文時代晩期(約3,000年前)までのそれぞれの時代の土器が多量に出土している。
51	大林古墳群		●		34						●	烏谷を谷川沿いに登ると、右方に横谷が展開し、横谷の奥にハブ池がある。池の北側に迫る山の斜面をさらに東に登ったところに古墳が造られている。昭和44(1969)年当時で4基の古墳が残存。昭和57(1982)年の調査では一帯はミカン畑に開発され2号墳と4号墳は消失し、南斜面に1号墳が残存するのみである。
52	烏谷布目瓦出土地		●		34						●	字烏谷の観音堂に通じる道の途中に布目瓦の出土地がある。観音堂の手前約100mの道路の西側に狭い造成地があり、そこから小片2点が採集された。外面にはやや細かい布目が施されていて、内面には不規則に並ぶ線文が刻まれており、平安期のものとされる。
53	塩屋築田遺跡		●		34						●	塩屋川改修工事の際に縄文土器片と中世以降の木樋2本等が出土した。
54	塩屋阿弥陀堂貝塚		●		34						●	阿弥陀堂改修の際、平安～鎌倉時代の貝塚が発見された。
55	高山遺跡		●		34						●	弥生時代の土器や石器が採集されている。
56	大津出口貝塚		●		34						●	市内の貝塚は、堂山貝塚を除いていずれも小規模。時期としては出土器からみて室町時代以降に属するものと推測される。
57	堂山遺跡		●		5　30　34			●			●	現在の海岸線から約4km北側の通称「堂山」と呼ばれる山裾に位置し、山陽自動車道赤穂インターチェンジ建設や鉄塔建設の際に発掘調査が行われた。赤穂インターチェンジ建設地では平安時代以降の塩田遺跡が全国で初めて発見されたほか、縄文時代前期から晩期にいたる多量の縄文土器や、古墳時代以降の製塩土器などが多数出土した。
58	坊主屋敷跡		●		34					●	●	僧庵の跡と伝えられており、周辺には若干の平坦地、石段、土塁、井戸跡と思われるものが残されている。
59	荒神社(塩屋)		●		5　6　30　31　33					●		創立年月は不詳。皇極天皇のころ(7世紀中ごろ)秦河勝が素戔嗚尊を勧進し創建したと伝えられる。延宝3(1675)年、正徳5(1715)年、寛政12(1800)年の棟札に再建・修復が行われた記述がある。別称「正面さん」。明治42(1909)年には若宮社・金毘羅社・塩釜社を合祀した。境内には市内で比較的古い廻船絵馬が奉納されている。秋祭りに行われる塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
60	三宝荒神社(木生谷)		●		6　33					●		正保元(1644)年に折方村の荒神社を勧進して創建。祭神は素戔嗚命。拝殿には江戸後期に活躍した絵師法橋義信の四十七義士画像図絵馬が掲げられている。境内に大正8(1919)年に流月庵から村が譲り受けた稲荷神社を合祀。
61	日吉神社		●		5　6　33					●		戸島新田の造成により住民が定着したため、承応元(1652)年に藩主浅野長直が近江の山王大権現宮(日吉大社)を勧請したのが起こり。祭神は大山咋神・香山戸神・羽山戸神。宝永7(1710)年に森長直が本殿・拝殿・鳥居等の再興を行った。明治元(1868)年には神仏分離令により「山王権現神社」を日吉神社に改称。境内に稲荷神社・天満宮・水神社が合祀されている。
62	森吉稲荷神社(大津)		●		6					●		八幡宮の参道の西に、稲荷神社・金刀比羅神社・鍋ケ森神社を祀った一角がある。稲荷神社は明治2(1869)年3月15日に勧進、一説には明治42(1909)年に合祀されたという。2月初めの午の日に宮司、宮総代、参拝者によって祭礼が行われる。金刀比羅神社は掛山にあったものが昭和56(1981)年に合祀された。鍋ヶ森神社は、水不足に悩む村人が、水神を祀る千種町の鍋ケ森神社から分霊を勧進したものと伝わる。また、ここにはかつて和気清麻呂が船を繋いだという伝承のある松の大木があり、現在祠の中に切り株が残されている。
63	八幡神社(大津)		●		6　32　33					●		和気清麻呂が豊前の宇佐八幡宮からの帰路に寄港し、八幡神を勧進したのが始まりと伝える。社殿は天正年間(1573～1592)に宇喜多秀家の軍勢が駐屯した際にすべて焼失し、その後明暦2(1656)年に本殿再建。薬師堂内にあった(現在は歴史博物館寄託)2体の木造菩薩立像は平安時代後期の作風をみせ、市指定文化財となっている。鳥居は享保20(1735)年の銘があり、坂越の生島、西有年の大避神社に次いで古いもの。
64	鍋ケ森神社(大津)		●		6					●		水不足に悩む村人が、水神を祀る千種町の鍋ケ森神社から分霊を勧進したものと伝わる。旱魃時には、ここで雨乞いの神事が行われた。参加者に飴湯を振る舞い、全員で雨乞いしたという。
65	若宮神社跡		●		6					●		奈良若宮神社の分霊を勧請して祀られていたが、明治42(1909)年に境内神社に合祀。神社のあった頃、7月15日に行われていた祭礼には道路沿いに露店が並び、力相撲も行われて大いに賑わったという。
66	真光寺		●		5　6					●		浄土真宗西本願寺派に属し、僧善明が創建。永正3(1506)年、西有年の六道山遍照院よりこの地に移ったとされる。山号は遍照山。山門(東表門)は立派な雄龍雌龍の彫り物のある四脚門。
67	蓮岳寺		●		6					●		「岡山最上稲荷神社赤穂支所」として建立。桜対の麓の字奥田は、播磨国主大伴宿祢がハブ山を開発した際に桜谷の奥も開墾したため、奥田と呼ばれるようになり、塩屋で最も古い田と伝わる。山号は桜妙山。
68	光浄寺		●		5　6					●		干拓により、慶安3(1650)年に新田居村、明暦3(1657)年に五軒家、寛文5(1665)年に十五軒家と七軒家ができ寺が創建された。享保21(1736)年に万福寺(浄土真宗)に願い出て、藩庁の許可を得た翌元文2(1737)年、万福寺の寺家であった光浄寺を移したのが起こり。山号は戸嶋山。寺では寛政年間頃(1789～1801年)に、新田村を作った藩主、浅野長直・長友・長矩の木像を作って安置し、以来長直の命日である毎年8月24日に「たくみさん」という法要が営まれている。
69	妙典寺		●		6					●		文亀2(1502)年に備前国浦伊部の僧日慧上人が、大津の法華垣内に法華道場を開設したのが始まりと言われる。寛永17(1640)年に赤穂城下に移転、その後藩主浅野長友が生母の菩提寺として大改修し、寺号を高光寺と改めた。この時妙典寺の寺号を残すため、大津の船渡に寺を再興して現在に至っている。山号は啓運山。寺には江戸時代に赤穂藩主が立ち寄ったことを記した記録が残されている。
70	安養寺		●		6					●		安養寺は大治元(1126)年に大和国南河内郡天見村の得蓮院了乗が、西国修行の途中に立ち寄り草庵を結んだのが始まりという。当初は真言宗で、浄土真宗の流布に伴い、元禄8(1695)年に改宗。大津八幡宮の神宮寺として加賀芋にあったが、改宗に伴い現在地に移転。山号は紫雲山。天明8(1788)年に本堂焼失、寛政6(1794)年に再興し現在に至る。
71	専法寺		●		6　29					●		宝暦6(1756)年に赤穂別院妙慶寺の支坊として、仏像を東本願寺から下付されて現在の木生谷集会所のあたりに開基した浄土真宗の寺院。文化2(1805)年に東本願寺より専法寺の寺号を受けた。明治11(1878)年に妙慶寺の末寺として独立。大正3(1914)年現在地に寺坊を移した。山号は潜龍山。平成4(1992)年大改修を行い現在に至る。
72	岩屋寺跡(薬師寺跡)		●		29　34					●	●	土塁によって囲まれた5間四方の礎石が残る。周辺から平安時代頃の須恵器椀が出土している。加里屋新町にあった長安寺の前身であったと伝えられている。
73	大慈庵跡		●		6					●		花岳寺の末寺として正徳5(1715)年建立された。境内は20間四方であったが、昭和10(1935)年頃、無住となる。現在境内は県道となり、当時の井戸が現存する。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（3）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名　称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解　説
74	西の御大師さん （大師堂）		●		5　6　35					●		以前は炭屋台に祀られており、塩業に従事する塩屋の人々の信仰と集いの場であったといわれる。昭和32(1957)年に現在の桜谷に移設。建物老朽化のため昭和60(1985)年に改築。 本尊は、自然石に浮彫が施された60cm程度の大師像。大正時代に流行病で亡くなった人々への供養のための観音像1体と大師像2体が安置されており、自然石に半肉彫りの地蔵、「二ばん」と記載のある半肉彫りの弘法大師像、「二十一ばん」と記載のある観音菩薩像、大正9(1920)年造立の弘法大師像が安置されている。毎月1.15.21日には御詠歌が詠唱される。 桜谷の翁（むじな）が人をだまそうとする逸話がある。（赤穂の昔話）
75	阿弥陀堂（塩屋）		●		6					●		縁起には、嘉吉2（1442）年、西有年の六道山逼照院より移ったと記されている。本尊は阿弥陀如来。本堂改築の際、平安時代～鎌倉時代の貝塚が確認されている。
76	流月庵		●		6					●		新田村にあった禅宗の草庵が廃寺となっていたのを、正徳元(1711)年に木生谷出身の新田の大庄屋、三宅政清が現在地に移したのが始まり。昭和54(1979)年の庵主没後、仏像・仏具等は北野中の興福寺の管理となる。観音堂には、観音菩薩・弘法大師・地蔵菩薩が安置され、播州赤穂坂内33ケ所霊場の21番札所。庵の裏庭には安祥慈穏比丘尼や三宅氏の墓などがある。
77	横谷住居跡		●		5			●				『播州赤穂郡志』に「塩屋村鱧谷より出村也。鱧谷は正面荒神山の後、横谷溜池の谷なり。」と記されており、塩屋村の起こりが背面山塊の合間にある横谷の地であったと伝えられている。現在は、石垣や井戸の石組等の遺構が残るのみであるが、大正時代まで人々が生活していた。
78	戸島用水		●		6　27　28	●	●					正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田開発を積極的に行った。慶安2(1649)年には「戸島井溝」を掘削し、翌年に戸島新田村を成立させた。この用水は旧赤穂上水道の導水路を活用し184町9反5畝(185ha)の灌漑用水として、また新田居村地区の生活用水としても利用され、現在も農業用水として役目をはたしている。大正2(1913)年からは鵤和地区にも送水している。
79	戸島新田		●		27		●					正保2(1645)年、赤穂に入封した浅野長直は、城や城下町の整備とともに新田開発を積極的に行い、慶安2(1649)年には「戸島井溝」を掘削して、184町9反5畝(185ha)の戸島新田を開発した。
80	西浜塩田跡地		●		5　6　30			●				古代から製塩が行われていた塩屋では、近世になり池田時代～浅野時代～森時代と塩田開拓を行った。尾崎地区・御崎地区の東浜塩田に対して、塩屋地区は西浜塩田と呼ばれ、宝永3(1706)年で95町2反8畝ほどあったとされ、西浜での平均生産高は約10万石と推定されている。西浜は主として真塩と称する上方向けの上質塩を生産し、大坂市場を得意先としていた。
81	柴原本家（浜野屋） 屋敷跡		●		5　6　30		●					柴原家は尾崎村より元和6(1620)年に移住。赤穂屈指の塩田地主・豪商となり、赤穂藩(森家時代)の蔵元役、塩屋村大庄屋を務めた。文化年間(1804～1818)には田畑23町余(約23ha)、塩田28町余(約28ha)、屋敷3反1畝余(約3100㎡)、大坂掛屋敷3軒その他、数えきれない程の借家を所有していたが、近代に没落した。
82	寺田家住宅		●		5		●					寺田家は西浜塩田の有力地主の一つ。「志保屋（しほや）」の屋号で塩問屋を営んだ。旧備前街道に面した邸宅は母屋、離れ、茶室、蔵など9棟からなり、木造厨子二階建ての主屋は、通りに面した上階部分が江戸時代中期の建築といわれ虫籠窓が特徴。敷地北西の茶室「蓬庵」は藪内流を象徴する「燕庵」を忠実に写している。地域のまちなみに重要な役割を果たしているとして、兵庫県景観形成重要建築物に赤穂市で初めて指定された。
83	塩屋村会所跡		●		5　6		●					江戸時代に、塩屋役人の詰所として使用されていた。脇には塩屋村道路元標がある。
84	新田組大庄屋 三宅家の屋敷跡		●				●					三宅又兵衛清貞が貞享3(1686)年に木生谷より出てこの地に居を構えて以来、廃藩置県まで9代約200年もの間、大庄屋三宅家の屋敷があった。
85	西惣門跡		●		6　27		●					備前街道より赤穂城下へ入る西の惣門であり、枡形が築かれ番所が配置されていた。その門の一部は、明治4(1871)年に花岳寺住職仙珪和尚が買収後花岳寺の山門として移築し、平成元年(1988)に市指定文化財となっている。
86	木戸の口跡		●		6		●					江戸時代には、塩屋村へ出入りする木戸門があったと言われ、治安維持のために出入りする者を見張っていた場所である。
87	塩硝蔵跡・ 塩硝蔵番小屋		●				●					森時代、鉄砲の火薬を作る塩硝蔵(火薬庫)が建てられていた。はたき蔵といわれる瓦葺4間2間(約8×4m)の作業蔵と瓦葺3間2間(6×4m)の火薬庫が建てられ、その上には火事に備えて池が造られていた。また現在は高さ約2mの石垣上に幅約30m、奥行き約15mの平地だけが残っている。蔵の上手と下手には藁葺の番小屋が置かれていたが、現在は農家の納屋となって1軒残るのみである。
88	出口の底井出跡		●		6		●					天保時代(1820～1840年)の末期、大津村庄屋の浜田繁治は出口地区を干ばつから救うため、私財を投じて地下に底堰を造り、伏流水をここから放流した。
89	長尾の池跡		●		35		●					かつて27m×29mの池があり、近くの処刑場で打ち落とされた首を洗ったため池の水は赤味を帯び、日に7度も色を変えたので「七色の池」と呼ばれた。また仇討があり池の中へ若者が返り討ちにされたことから「うらみの池」の別名がある。
90	蓼場跡		●		5　30			●				西浜塩田の水尾にあり、潮の満ち引きを利用してここに塩廻船を停船させ、船底についた貝を焼いて掃除した。現在のドック（船渠）のような役割を果たした。
91	かんにん橋		●				●					石橋の側面の一方には「堪忍橋」、もう一方には「かんにんばし」と刻まれている。正月屋と言われる大家が衰退したが、逆境に耐えて「堪忍、かんにん」と働き、家を再興させたという話が残る。小橋川に架けられていたが、道路工事の際、現在地に移された。
92	船渡橋		●		6　36	●						大津川にかかる橋の一つで、古来はこのあたりまで海岸線が迫っていたといわれている。
93	小橋川の洗い場の石		●		6		●					旧塩屋村の北辺には、近代上水道が設置されるまで戸島用水から引いた小橋川に、長さ約30mにわたる石造りの洗い場があった。上流から順に、水汲み場・米や野菜の洗い場・洗濯場・おしめ洗い場・牛馬洗い場が並んでいたといわれる。小橋川が暗渠となる際に、現在地に移された。
94	金時さんの足跡		●		35					●		「金時さんは、小豆島から海を跳び越え、片足はこの石の上に、もう一方の片足は高山についた。」と昔話は語る。（赤穂の昔話）
95	おんびき岩（上）・ 牛岩（下）		●		35					●		道の上側にガマガエルの形をした「おんびき岩」、道の下側に「牛岩」と呼ばれる巨石があり、塩屋に伝わる昔話に「仲のよい三つの岩」の二つとして語りつがれている。（赤穂の昔話）
96	お鐘石		●		35					●		50m登ったミカン畑にある。塩屋に伝わる昔話「仲のよい三つの岩」の一つ。春分・秋分の日には尾形にある「オンビキ岩」から真東となるこの石の上から日が昇るという。（赤穂の昔話）
97	げんじょの岩		●		2　35					●		塩屋の荒神社の裏山にあり、高さ約2.5mを測る花崗岩。矢穴が穿たれており、赤穂城築城に伴う石切りとの関連も指摘される。上方には「げんじょの台」と呼ばれる見晴らしの良い場所がある。げんじょの台は、昔話「お伊勢まいり」に登場する。（赤穂の昔話）
98	八畳敷		●		35					●		塩屋の横谷から木津・真殿の方に繋がる山道には、金玉袋を八畳くらいまで広げて旅人を襲う化け物が出たという。しかしある時ついに退治され、その正体は大きな古狸であったという昔話が伝えられており、この昔話の舞台となった横谷にある大岩を「八畳敷き」と呼びならわしている。（赤穂の昔話）
99	おも石（主石）		●							●		横谷の渓谷を流れる川の中に家のように大きな岩があり、川の主であると伝えられ「主石」として親しまれてきた。主石と八畳敷きがある横谷の渓谷は、山道が荒れているため、現在は探訪が困難。
100	三本松		●				●			●		明治25(1892)年の洪水の際、現在地付近で3本の松の株が見つかった。昭和63（1988）年には河川改修工事の起点に記念碑とともに松が植えられた。
101	二重の石垣 （今荒神の砦跡）		●				●					西方の大津、南方の瀬戸内海、東方の尾崎が見渡せる小字今荒神の山頂付近に二重の石垣が見られる。現在見られる石垣は牧場開拓の際に積まれたものであるが、『播磨鑑』に記述された昔の砦跡を偲ばせるものである。塩屋の山中に戦国時代の山城が存在したのかもしれない。現在は私有地のため立ち入ることはできない。
102	猪垣(大津)		●		6		●					大津の備前街道に沿って造られ、農作物や人家を猪の被害から防いでいた。
103	木生谷の猪垣		●		6		●					いつ頃造られたかはよくわからないが、木生谷集落を囲むように石垣が造られ、人家や農作物を猪の被害から防いでいた。
104	西灘小学校跡		●				●					明治5(1872)年に学制が発布され、新田以西の5カ村内に6校の小学校が開校したが、明治9(1876)年には6校が合併して西灘小学校が開校された。明治36(1891)年には木生谷尋常小学校に移転した。
105	赤穂実科女学校発祥地		●				●					明治45(1912)年、塩屋村他5カ町村の組合立赤穂実科女学校が創立され、袴姿の女学生が通っていた。当初塩屋尋常小学校が置かれ、次に赤穂実科女学校、塩屋村役場、塩屋保育所となり、現在は公園及び屋台格納庫となっている
106	木生谷尋常小学校跡		●				●					明治9(1876))年に新田以西5部落6校が合併して西灘小学校が開校されたが、明治36(1891)年にはこの地に移転され、木生谷尋常小学校となった。
107	海食崖跡		●			●						荒前から神保にかけての田地の中に、北西方向に高低差1m程度の小崖が続いている。地表下1～1.2m以下が海成とみられる砂層となっていること、近くの堂山、田茂に海成とみられる堆積物があることから、この小崖は縄文時代の海食崖(海岸線)と考えられている。
108	旧備前街道		●		6　27		●					備前街道は、赤穂城下から新田を経て、船渡から大津川右岸の山際を通って帆坂峠に続いていた。現在、大津川と山麓の間にその跡を見ることができる。
109	帆坂峠		●		6　27　32		●					兵庫県と岡山県の県境にあり、大津川の源流となっている。

塩屋地区の歴史文化遺産一覧（4）

※視点番号は 252 頁を参照。

No.	名 称	もの	場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化 1	2	3	4	5	6	解 説
110	以良羅山		●		6		●					古くから「イララ山」と呼ばれる。古代の朝鮮語で「ラ」は津・港の意味があり「ララ」は津渡、イは場所の意味で、イララは津を渡る場所の意となるため、渡来人による命名ではないかと考えられている。山頂に大正13(1924)年に塩屋村在郷軍人会によって建てられた忠魂碑があり、戦没者246名の霊を祀る。昭和27(1952)年、昭和44(1969)年に設置された2基の緊急用上水貯水タンクは役目を果たし平成19(2007)年に撤去。山一帯は昭和45(1970)年に風致地区に指定された。
111	黒鉄山		●		6　35		●					大津地区の北側にそびえる黒鉄山は標高430.9mを誇る。頂上からは北は中国山脈、南は淡路島・四国が望める。第二次世界大戦までは山麓で銅鉱石の採掘が行われていた。大正時代初期頃まで、旱ばつ時には降雨の祈りをこめて村人総出で山頂にうず高く積み上げた薪を焚いて雨乞いを行った。氏神様を崇めなかった大津への天罰に関わる昔話がある。（赤穂の昔話）
112	高山		●		6		●					標高約299mを測る。旧塩屋村の北側の山々の中で一番高い山である。山腹には赤穂市の「赤」字が、ウバメガシとシイによって昭和47(1972)年に浮彫植樹されている。下方にはかつて石粉採取地があった。以前は米を精米するため、農家の人々がここでよく石粉を採っていたと伝わる。弥生土器や石鏃、須恵器が採集されている。
113	大津川		●		6	●						大津川水系は、源を兵庫県・岡山県県境の帆坂峠に発して、大津湯ノ内川、権現川と合流し流れを南東から南西に変え、さらに折方川合流点で南へ変え、塩屋川と合流した後、播磨灘に注ぐ二級河川である。昭和51（1976）年に全面改修された。
114	塩屋川		●		6	●						昭和51（1976）年の台風被害の復旧のため、昭和57（1982）年に二級河川として改修完成した。改修は長さ2,470m、橋梁10橋に及んだ。工事の起点場所には昭和63（1988）年に三本松の碑が建立された。
115	横谷の渓谷		●		35	●						横谷は塩屋でも最も古く人々の居住地であったところで、山道は木津・真殿へ続いている。渓谷の中には「八畳敷」と呼ばれる広い岩場があり、狸にまつわる昔話がある。（赤穂の昔話）
116	権現池		●		6	●						水不足が深刻であった大津は灌漑用のため池が多く造られ、権現池は中でも規模の大きいものである。権現池は天保年間(1830～1844)に当時の庄屋の資金を得て着工、その後赤穂藩が決壊防止のための大工事を行い、約10町歩の田の水源として利用された。昭和18～19(1943～1944)年に堤防を高く改修、昭和49(1974)年に余水吐の改修を行い、平成13～14(2001～2002)年度に堤防等の改修を行って現在に至る。
117	帆坂池		●		6　35	●						県境のある帆坂峠近くにあり、開削時期は不明。全国的に大飢饉の続いた天明年間(1781～1789)に当時の庄屋、有本新九郎が中心となり大改修を行ったことが明らかとなっている。この工事での出費がかさんだため年貢が滞り、新九郎は領外追放となって三石で没したという話が伝わる。昭和24(1949)年に堤防が決壊して大津に水害をもたらし大改修が行われた。平成8～10(1996～1998)年度にかけて堤防・放水設備等の改修が行われている。北田・南田・出口・奥・中開地等に水を供給している。帆坂池の大蛇が赤穂藩主をだました逸話がある。（赤穂の昔話）
118	湯の内池		●		6　36	●						黒鉄山東麓に位置し、大津のため池の中で最大。開削時期は不明だが、江戸時代中期には既にあったと推測される。文化4(1807)年に堤防が決壊し、死者1名を出したことが記録に残る。昭和30年代に堤防の補強・大改修を行い、昭和63(1998)年度から平成3(1991)年度にかけて余水吐、放水設備の改修を行った。長坂・奥・クボリ・スクモ塚・中開地・加賀苧の各地区の田に水を供給。この池の水は緑色をしており、戦前まで近くに銅鉱山があったため、銅鉱石の影響ではないかといわれている。
119	ハブ池		●		5　6　31	●						小波布川の水源となる池。
120	西の谷池		●		6	●						木生谷の荒神社裏に築かれた池。
121	塩屋東屋台蔵		●		5　33		●	●				塩屋荒神社の秋祭りで使用される屋台が収納された蔵。塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
122	塩屋西屋台蔵		●		5　33		●	●				塩屋荒神社の秋祭りで使用される屋台が収納された蔵。塩屋荒神社屋台行事は市指定文化財。
123	旧塩屋村(塩屋)		●		30　32　36		●					地名。古代は海潮の干満の地であった。後背山地には縄文時代以降の遺跡が点在する。8世紀中ごろに、ハブ谷周辺と思われるあたりが、東大寺領の塩山であった。横谷のお鐘石・荒神あたりの住民が製塩のため山麓や海岸部に移り潮家に住み始めたのが塩屋村の起源という。
124	山陽自動車道		●		6　27		●					兵庫県神戸市北区を起点に、岡山県、広島県を経由して山口県山口市へ、および山口県宇部市から同県下関市へ至る高速道路。
125	山陽自動車道 赤穂インターチェンジ		●		6　27		●					山陽自動車道の入り口で、敷設に伴って兵庫県教育委員会による堂山遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代以来の歴史が明らかとなっている。
126	山陽新幹線		●		6　27		●					新大阪駅から博多駅を結ぶ。昭和42(1967)年3月16日、赤穂市で山陽新幹線「新大阪 ～岡山間」の起工式が行われた。
127	JR赤穂線		●		6　27		●					播州赤穂～東岡山までの路線。昭和26(1951)年に国鉄相生～播州赤穂間が開業。昭和30(1955)年に播州赤穂～日生間が延伸開業。
128	赤穂ピクニック公園		●				●					高山にあり、牧場として使用されていた丘陵地を利用して、市街地から瀬戸内海にかけての展望、四季折々の花や実、紅葉が楽しめる公園として、平成12(2000)年にオープン。広場や野外ステージがあり、林間散策道や百花園(赤穂の森)には赤穂を代表する植物を主に、魏志倭人伝、万葉、生島樹林の植物探索コースが設けられている。
129	グリーンベルト		●		5		●					塩田跡の工業地帯と住宅地域との間の公害緩衝緑地事業としてつくられた、総延長4kmの緑地帯。昭和43(1968)年に着手、昭和52(1977)年4月に工事完成。
130	塩屋荒神社屋台行事			◎	5　33					●		10月25日に最も近い土日に開催される塩屋荒神社の秋祭で、東西2地区の大屋台のほか多数の子供屋台等が登場し、途切れることなく唄われる伊勢音頭を背景として練りや差し上げが行われる。明治に遡る歴史をもち、文化財的価値がある屋台等を維持している点で、市の無形民俗文化財に指定された。
131	宮大工の技術			◎								宮大工は近世以降家大工と分離して社寺専門大工となり、さらに文化財城郭建築などの改修も受け持つようになった。伝統的な技法を会得している和田貞一氏を選定保存技術保持者として選定している。
132	石塩生荘(赤穂荘)			●	5　30　31			●				製塩に関する荘園の名前。大治5(1130)年には東大寺が「石塩生荘」として50町9反172歩、塩山60町を保有していたと記録されている。仁平3(1153)年頃には、石塩生荘が「赤穂庄」と呼ばれ始めたらしい。
133	六百目			●	36	●						地名。昔からの度重なる水害により、肥沃な土が1丈(約3m)程度堆積したため、1反に600匁(六百目)も出さないと買えないほど値打ちのある上田になったとの云われがある。
134	聖生山			●	5　30　31		●					「ハブヤマ」と読み、天平勝宝8(756)年の古記録によると聖生山(塩山)30余町が東大寺に施入されている。塩山は製塩の材料となる薪を伐採する山。
135	大津			●	6　27　32　36	●	●					地名。古代にこのあたりは海で、大津は広い港の意味。帆坂から大津湾(荒前あたり)に入った舟帆を眺められたという。大津千軒井七ツの口碑が伝えられるのは港町として栄えたことを表す。
136	木生谷			●	32	●	●					地名。いわれは不明。『赤穂郡誌』には薩摩の浪士が木生谷に隠棲したとき、折方の住人が7戸移住して、木生谷に村ができたというが、詳細は不明。
137	船渡			●	6　27　36	●	●					地名。その名の示す通り、船が通った場所が地名となったものと推測される。
138	新田			●	32　36	●	●					地名。大津川河口に位置し、もとは沼沢や古浜であったが、正保2(1645)年、赤穂藩主浅野長直が入封の翌年から20年をかけて新田地100余町歩を開拓して成立した土地。そのため唯一の山なし村であった。
139	五軒家			●	36		●					地名。万治3(1660)年に5軒の入植があったことによる。
140	七軒家			●	36		●					地名。寛文5年(1665)年に入植した家数による。
141	十五軒家			●	36		●					地名。寛文5年(1665)年に入植した家数による。
142	若宮			●	36		●					地名。京都若宮神社の分霊を祀った。明治42(1909)年に荒神社へ合祀。
143	片浜			●	36		●					地名。塩田跡地。
144	西ヒジリコ			●	35		●					地名。石工が西ヒジリコの石山に砕石に出かけ、大蛇を退治する昔話がある。（赤穂の昔話）